

リヴィング・ニズムのなかのキリスト教政治思想

——原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義』に寄せて——

犬塚 元

学生時代に用いた教科書の知見は、そのままでは維持できなくなっていく。思想史学を含む歴史学でも同じである。新しい史実が発掘されたり、意味づけが修正されたりすることで、歴史の見取り図は不断に変容を迫られる。

西洋政治思想史学において、大きな修正を被ったのはカルヴァン主義の意味づけである。カルヴァン主義やイングランドにおけるピューリタニズムは、近代の政治思想のうちもっとも重要視されてきた系譜のひとつである。良心の自由など、リベラル・デモクラシーと結びつく

(それゆえに「近代的」と形容された)政治的価値の形成に果たした役割ゆえである。ヴェーバーの影響も大きかった。しかし、あまりにカルヴァン主義を中心に近代政治思想史の展開を理解してきたことが、近年では問い直されている。「ピューリタン革命」と意味づけされていた政治変動は、「イングランド内戦」や「三王国戦争」と表現されるようになった。

人間の罪深さ、神と人間の隔絶を強調するカルヴァン主義は、神の意志の絶対性を説く主義思想である。ヴェーバーは、ここから世俗内禁欲が逆説的に導かれたことをスリリングに示したが、その後の研究は、人間の自由意志

の役割を認めてカルヴァン主義を批判したアルミニウス主義が近代科学や啓蒙の形成に及ぼした影響をさまざまに指摘した。日本でも、たとえば山田園子『イングランド革命とアルミニウス主義』(聖学院大学出版会、一九九八)は、アルミニウス主義と政治変動の関連を解明して、カルヴァン主義中心史観を批判した。

原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義——神学と政治の連関——』(二〇一四)も、反カルヴァン主義の系譜に着目するこうした研究動向のなかに位置づけることができる。それは、ベリンジャー・ウィチカット、ヘンリー・モア、ラルフ・カドワース、ジョン・スミスら、ケンブリッジ・プラトニストと呼ばれてきた一七世紀中期のキリスト教思想家を新たな視角から解読した力作である。彼らは、カルヴァン主義に對抗して、新プラトン主義を受容しながら理性や自由意志の役割を重視した。

もとより、ケンブリッジ・プラトニストをカルヴァン主義と対抗関係に置く構図そのものは、日本でも広く知られてきたカッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス』(三井礼子訳、工作舎、一九九三、原著一九五三)と同様である。カッシーラーは、ピューリタニズムと経

験論という、いずれも「活動」を重視する近代思想と対峙して「観想」を重視した系譜としてケンブリッジ・プラトニストを理解して、イタリア・ルネッサンスとドイツ人文主義を架橋する思想的な位置を与えた。しかし本書は、彼の解釈に正面から挑んでいる。第一はカッシーラーが、カルヴァン主義中心史観を回避したとはいえ、やはり近代思想史を世俗主義・合理主義へと至る筋書きで理解して、その枠組みを遡及してケンブリッジ・プラトニストを解釈した点である。原田はこれに対して、彼らの思想の基本的特徴を宗教性・非世俗性に求める。

第二の批判は、観想主義との解釈に向かっている。ケンブリッジ・プラトニストは、同時代の政治状況や実践的課題に回答した思想家であったというのである。内戦期から復古王政期を生きたケンブリッジ・プラトニストが直面したのは、宗派对立や宗教的熱狂の克服、つまりはコンフェッショナルリズムの克服という実践的・理論的課題であった。こうした理解をふまえて本書は、まず第一部においてケンブリッジ・プラトニストの反主義的な神学体系を解明し、それをふまえて第二部で、彼らの政治思想を再構成する。本書には繰り返し多いが、それはこの思想系譜をさまざまに分節化して分析するがゆえであり、読者は、螺旋状に彼らの思想世界に誘われる。

第一部で中心主題となるのは、神と人間の関係をめぐる議論である。神の全能性を前提とするキリスト教において、人間の役割や能力をどう位置づけるかという伝統的な論点がテーマである。神と人間の隔絶を説くカルヴァン主義に對して、ケンブリッジ・プラトニストは、神と

人間の相互交流を語る。自らの完全性を現示しようとした神が創造した人間には、生得的に「理性の光」が与えられており、「神の似姿」を分有している。人間はそれを手がかりに「神への参与」をなして、神の恩恵のもとに「神の似姿」へと再創造されるべき存在だ、というのである。

魂の根底に神性を認めるこうした神的生得性の発想は、新プラトン主義を援用して語られた。超越的創造主から流出したヌース（知性）により創られた靈魂は、感覚界から観知界に上昇して神に関する認識を得る、というプロティノスの思想である。しかし原田が強調するように、ケンブリッジ・プラトニストは、このヘレニズム思想をあくまでキリスト教護教のために受容した。善の流出として、ロゴスの働きによって天地創造はなされたというヨハネ福音書の理解は、神の意志でなく神の善性の優位を説いている。それゆえに原田は、ケンブリッジ・プラトニストの自然法論について、主意主義的自然法の先駆とみなす近年の研究動向を批判して、あくまで神学的先知主義・客観主義的実在論の系譜において理解する。

もとより被造物は神にはなりえない。救済には神の恩恵が不可欠であり、神人関係はあくまで非対称である。しかしケンブリッジ・プラトニストは、人間の能動性（自由と責任）を重視する。それは、神の善性に適うように霊的完成に向けて可謬的本性を改善し続けて、神の再創造の業へと参与する能動性である。可謬的な人間を神へと向かわせるのが、理性、自由意志、愛の役割である。ここでの理性は「個人の内面に属する自由な能力」だが、しかし、それは

「神への参与」を志向するあくまで宗教的な概念である。原田によれば、このようにして信仰と理性の調和を説いたケンブリッジ・プラトニストは、「信仰と理性の双方の過度」を防ぎ、カトリック的迷信、プロテスタント的熱狂、無神論の治癒をめざした。理性を掲げて人間の可謬性を説き、万人の一致点を探るかたちで、宗派対立の克服を図ろうとしたのである。

同じ実践的目的から、彼らは国教会の内部に最大限の多様性を包摂して、国教会外にも寛容を認める立場であった。本書第二部はこの教会論のように、現世やそこでの実践に関わる議論を分析する。来世に向けた道徳的準備として、現世においても、信仰に基づいた道徳的行為が要請される。原田は、ケンブリッジ・プラトニストの黙示録・千年王国論から歴史意識を抽出して、彼らが「中間的現世」を軽視せず、来世に向けての神との交わりという非政治的目的に奉仕する相対的意義を認めていたと結論する。

このように本書は、ケンブリッジ・プラトン主義の内在的理解の次元において、国際水準の研究を咀嚼して独自の成果を提示した。そればかりか、本書の成果や意義については、より広い思想史研究の文脈のなかに位置づけて指摘することも可能である。

まずなにより、コンフェッショナルリズムの克服という理論的・実践的課題を初期近代の政治思想の多くが共有していた、という近年の研究知見を着実にふまえたうえで、ケンブリッジ・プラトン主義の思想営為をそのひとつのヴァージョンとして位置づけた意義は大きい。宗教改革よりも、宗教対立の思想的意味を重視する歴史理解が、ここでの前提である。コンフェッ

ショナルリズムの克服は、ボダンやホッブズの主権論だけが応答した課題ではない。宗派対立の経験をつまえて、いかに規範や社会秩序の基盤を再構築するか、という課題に対する思想的応答は、自然法論、寛容論、スピノザの聖書解釈、あるいは啓蒙の社交・商業・文明論など広範囲に観察できる。本書が鮮やかに示したのは、宗教的理性主義によるキリスト教の再定位というヴァージョンの応答である。

次に、イングランド思想史理解における貢献がある。原田は、ピューリタニズムと経験論を両輪にして語られる「近代」理解に異議を申し立て、「中道的近代」という分析概念を提示する。議会が絶対王政に勝利をおさめて名誉革命において立憲主義・議会主義が確立した、という旧来のウィッグ主義の見取り図は、いまや、国教会穏健派や穏健王党派をめぐる研究、「アングリカン啓蒙」や「アルミニウス啓蒙」をめぐる研究をふまえるならば、そのままでは維持できなくなっている。イングランドやブリテンの「近代」は、君主政や国教会と不可分に進行したからである。

ケンブリッジ・プラトン主義は、次世代の広教会主義に継承されて、これが名誉革命体制の基軸思想となった。原田はこうした見取り図を採用して、この系譜の延長にイングランドの「中道的近代」「広教会派の近代」「アングリカンの近代」を位置づける。それは、厳格なカルヴァン主義を退けて、蓋然主義・可謬主義の立場から国民統合と宗教的平和を掲げる国教会穏健派が担った「近代」である。原田は、この系譜の特徴を「中道」に求める。「広教会派的近代」が、カトリックとピューリタン、高教会と

低教会、トリーとウィッグ、世俗と宗教の調和をめざす中道路線を採用したように、その源流のケンブリッジ・プラトン主義も、さまざまな二項対立の中道を歩んだものである。理性と啓示、自由意志と恩恵、行いと信仰、主知主義と主意主義、内在と超越、自然と超自然、自律性と神律性、ヘレニズムとヘブライズム、アルミニウス主義とカルヴァン主義といった二項対立のなかで、ケンブリッジ・プラトン主義は「知的総合」を果たした「大いなる折衷主義」であつたという理解である。

こうした分析は基本的には説得的であるが、さらに論じうることも潜んでいる。曖昧な部分も残る。たとえば「神学と哲学、すなわち創造論と存在論」や、「宗教と世界、神学と政治、また超越と内在の両論理」のように、レトリカルなパラフレーズを多用する著者の叙述スタイルは、ややもすれば、すべての二項対立がひとつの二項対立の展開形であるかのような印象を与え、それぞれの概念の意味を曖昧にしてしまう。中道的・折衷的であつたという結論の繰り返しは、中道的ではなかった部分を曖昧にもしている。アングリカン教会には、一方でキリスト教会としての使徒伝承性という側面、他方では世俗権力によって設立されて、王が教会の首長であるというエラストゥス主義の側面があるが、この論点においてケンブリッジ・プラトニストは中道的でない。原田は、彼らがエラストゥス主義に否定的であつたと分析している。

だがそれ以上に、中道性・折衷性を強調したことで興味深いかたちで顕在化しているのは、思想の系譜分類をめぐる思想史上の問題である。原田がなにより力を注いだのはケンブリッ

ジ・プラトン主義の内在的分析であるが、そのうえで本書は、二次文献を渉猟する手続きによって他の思想系譜との関連についても論じており、ケンブリッジ・プラトン主義に思想的コンテクストを与えている。新プラトン主義はもとより、ストア主義、トミズム、「アルミニウス主義」、「リベラルアングリカン」、「広教会主義」などとの関連や異同である。折衷的ということは、別の系譜とされる思想と共通性をそなえるということである（本書が論じた以外にも、たとえば国教会論、ホッブズ批判、復古王政理解では、より世俗的な復古王党派との共通点が多い）。結果として本書は、ケンブリッジ・プラトン主義だけでなく、複数の部分的共通性が入り乱れる、幅広いスペクトラムの共時的・通時的な思想世界を描くことに成功している。

しかしそうであるならば、複数の部分的共通性がオーヴァラップするそうした思想世界に、そもそもどのように系譜分類を与えるかという問題が待っている。折衷性を強調する原田の分析結果からは、一九世紀に遡及的に命名された「ケンブリッジ・プラトン主義」という分類そのものを相対化する視座も得られるからである。本書が「体制アルミニウス主義」や「リベラルアングリカン」との微妙な異同を指摘しながらも、それらの定義については寡黙的であり、国教会内部の思想配置について曖昧な部分を残すのは、著者自身が以上のことを意識したことを示唆するのかもしれない。

さらに興味深いのは、カトリシズムとの関係である。ケンブリッジ・プラトニストが、カルヴァン主義との対決のなかで、カトリシズムが論じてきた「神の似姿」や「自由意志」の概念

に依拠したからである。原田もトミズムからの影響をさまざまに示唆する。ケンブリッジ・プラトニストは、カトリックを批判して新プラトン主義に依拠するかたちで教義を論じたが、しかし実質を見れば、トミズムとの関連は無視しえない。

ルネサンスと宗教改革によって中世と近代を峻別する思想史の見取り図（あるいは、世俗主義とカルヴァン主義によって近代を特徴づける歴史理解）は、近年、自然権や契約論・抵抗権の思想をめぐる個別研究を通じて再検討が迫られており、中世と近代の、あるいはカトリシズムと近代思想の連続性がさまざまに指摘されている。本書の成果も、そうした新しい思想史の見取り図から遠くないところに位置する。その意味で、アルミニウス主義の自由意志論の役割を重視し、近代ヨーロッパにおける「カトリックの伝統」の継続を示した半澤孝磨『ヨーロッパ思想史のなかの自由』（創文社、二〇〇六）が本書と併読されることが望ましい。もとより、かつてのカルヴァン主義中心史観を相対化するにせよ、われわれが歴史家として問うべきは、プロテスタンティズムかカトリシズムかという信仰の次元ではない。コンフェッションナリズムの克服という課題は、初期近代の思想家だけでなく、キリスト教政治思想のリヴィジョンに従事する現代の思想史家も共有すべき課題である。本書は、そのための手がかりをも与える。

（いぬづか・はじめ 東北大学教授／政治学史

原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義』ち